
各駅停車ショートショート

楽天家masa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

各駅停車ショートショート

【Nコード】

N3860D

【作者名】

楽天家masa

【あらすじ】

それは小さな町の物語。さまざまな人物が織り成す短編ストーリー。

街角の珍事

これは小さな町で起こる物語。

く柳敬太の場合く

「あのお……すみません」

ある昼下がり。俺は椅子に座っていると二十歳くらいと思われる女性が声をかけてきた。

「変なのを拾ったんですけど」

青い制服に身を包み、いかにも正義の味方ですと強調している俺の格好は警官の姿だ。

「ありがとうございます。中へどうぞ」

女性を中へ招き入れ、椅子へ座るように促す。

「それじゃここに名前と住所をお願いします」

適当なメモ帳を差し出して名前と住所を書いてもらう。

「それでは落とし物は派出所で預かっておきますね」

女性はそのまま派出所を出て行った。

「さて……と」

俺はその落とし物を自分のポケットに入れると、何事もなかったかのように派出所を出た。

「このスリルがたまんねーな」

俺、柳敬太は警官ではない。むしろ泥棒だ。最近通販で手に入れた警官の制服を着ては誰もいない派出所で警官のふりをして落としものをくすねている。

「それにしても何だこれは？」

女性が持ってきたものをじっくりとみると、ただの鉄の玉だった。

「もっといいものを持ってきてくれてもいいのにな」

そのとき、前方に自転車に乗った警官の姿が見えた。

「やべっ！ 本物だ」

あわてて落とし物を胸ポケットに入れ、帽子を目深に被り平静を装った。

「ご苦労様です」

相手が敬礼をしてきた。

「い、ご苦労様です」

「ここは俺も敬礼をしてやり過ごさねば！」

「あまり見ない顔ですが新人ですか？」

「は、はい！ 今日からこの辺りの警邏に当たらせていただきます
す柳敬太巡査であります！」

しまった！ つい本名を言ってしまった！ しかもなんだこの不
自然な言葉遣いは。

「そうですか、頑張つて下さい。それにしても中途半端な時期に入
ってきたんですね」

「えっと……ちよつと海外で経験を積んでからですので」

どうしちまつたんだ俺の口！ よくもそんな嘘がペラペラと！

「海外でねえ。治安維持の経験ですか？」

「えっと、柔道留学をば……」

そんなのしたことねえ！

「まあいいでしょう。ちよつと一緒に巡回しましょうか」

俺は榊部長に腕を引っ張られ、町内を一周させられた。

「ちよつとおなががすきましたね。コンビニにでも行きましょうか」
「は、はい」

俺はいつばれるかヒヤヒヤしながらも後をつけていった。

「あれ？」

コンビニに入って異様な雰囲気気づいた俺は息を呑んだ。

「くそ！ 警察か！」

そのコンビニには数名の客、そして明らかに客とは違う、おびえる店員に包丁を突きつけている男がいた。

「柳巡查。君柔道留学してたんだってね。期待してるよ」

榊部長は小声で俺に言ってきた。

「う、う、う、動くな！ こいつを刺すぞ！」

いきなりの警官登場に動揺したのか、強盗は声が上がっている。

「どどどどっししましょう？」

そして俺も動揺して声が上がっていた。

「落ち着きたまえ柳巡查。私がお手本を見せましょう」

榊部長は一瞬のうちに拳銃を抜くと、一発の銃声が店内に響いた。

「ぐあっ」

次の瞬間、男の持っていた包丁は弾かれていた。

「くそっ！」

男はそのまま裏口から逃げていった。

「さ、榊部長！ 犯人が逃げますよ！」

「……そうだね。でも別にそんなのはどうでもいいのさ」

さっきまで温和な顔立ちだった榊一郎巡査部長が、まるで別人のように冷たい顔になっていた。

「金を出せ」

拳銃を店員につきつけると、榊一郎は脅し始めた。

「こいつの威力はさっきの強盗で実証済みだ。死にたくなければ金を出すんだ」

女性の店員は恐怖で、言われるがままレジの金をそのまま榊一郎に渡した。

「お願い……殺さないで」

俺はすぐに逃げ出したかったが、女性店員のすぐるような目に動けずにいた。

「や、やめろお！」

いつの間にか俺の口からそんな言葉が出ていた。

「今やめろって言ったのはお前か？ 俺と同じ二セ警官の柳巡査」

ばれてた！

「そ、そうだ！ 強盗なんてみつともない真似、ニセ警官の名がなくぜ！」

って俺は何を言っただ？ そいつっている間にも銃口が俺に向けられる。

「それでも俺は元軍隊出だ。銃の扱いは慣れてるぜ？」

俺は足がガクガクと震えていた。

「撃てるもんなら撃ってみろ！」

その瞬間もう一度銃声が店内に響いた。体にもすごい衝撃が走り俺は吹っ飛んだ。

「死ぬー！ もうだめだー！」

胸を押さえて苦しむ俺。しかし、なぜか死んでいない。というより血の一滴も出ていない。

「そこまでよ！ 榊一郎！ 強盗の現行犯で逮捕する！」

恐る恐る目を開けてみると、手錠をかけられている榊一郎。その手錠をかけているのは派出所で落し物を届けに来た女性だった。

「みなさん落ち着いてください。私は警視庁市民課の大山警部補です」

器用に警察手帳を見せながら榊一郎を取り押さえている。

「助かった……のかな？」

俺は胸ポケットから銃弾を食い込ませた鉄の玉を取り出した。

「こいつが助けてくれたのか」

「ええそうよ。まったく、最近ニセ警官が続出するって通報があったから探ってたらかいかな事してくれたわね」

「俺、ニセってばれてたのか」

「ええ、柳敬太と榊一郎、この二人が怪しいと見てまずは柳敬太から見張ってたんだけど、まさか榊一郎も出てくるとはね」

「じゃあこの鉄の玉は？」

「発信機よ」

よく見ると銃弾で出来た裂け目から赤い光が見え隠れしていた。

「あら、応援が来てくれたみたいね」

数人の本物の警官に榊一郎は連行されていった。

「さて、柳敬太。詐欺罪の疑いで署まで来てもらっていいかしら？」

「ちえっ。体張ってまで強盗捕まえたのにつかまるのかよ」

「あたりまえでしょ？ まあ温情はあるけどね。手錠されないだけましだと思っ」

大山警部補につれられて店を出ようとしたとき、不意に後ろから袖を引っ張られた。

「あ、あの。ありがとうございます！ 出てきたらまたここに寄ってください！」

コンビニ店員にお礼を言われてまんざらでもない俺だった。

「これから真面目に働くのも悪くないかもな」
「なんなら本当に警察官になってみる？」

ニヤニヤしながら大山警部補がたずねてくる。

「やなことだ」

これからは俺にもちよつとはまともな人生が待っている。のかもしれない。

く柳敬太の場合く 終わり

お好み焼き屋の秘密

これは小さな町で起こる物語。

「浪花良太郎の場合」

秘伝のソースや鰹節の匂いが充満する中、ねじり鉢巻をして新聞を読んでいる男がいた。

「世知辛い世の中やなあ」

男の名前は浪花良太郎。小さな町でお好み焼き屋を営んでいる。

「小麦粉がまた値上がりか」

目を通しているのは経済新聞だった。しかし、書かれているのはお好み焼きランキングやたこ焼きおススメスポットや行列の出来る焼きそば屋など、つい祭りに行きたくなるようなラインナップだった。

「まいど」

ガラガラと引き戸を開けて入ってきたのは小麦粉業者の松屋章吉だった。

「今日の仕入れ分やで」

「いつもすまん。そこにおいといてや」

「こつちが店用で、こつちに持ち帰り用置いとくよー」

浪花良太郎のやっている店では、お好み焼きの材料の持ち帰りをやっている。お好み焼きの味が評判を呼んで持ち帰りたいという客が後を絶たなかったため、持ち帰りを始めたのだ。しかし、良太郎は出来立てじゃないと味が落ちる！ とのこだわりを持っていて、材料を持って帰ってもらい、自分で焼くようにさせている。

「ほな、あたしはこれでおいとまさせてもらいまっせ」
「松屋の旦那、また今度頼むよ」

それから良太郎は開店の準備にとりかかった。

「うーむ……」

いつもどおり店は開店した。だが、客はいつもどおりではなかった。

「にーちゃん！ 豚玉一つ！」
「あいよー」

いつもどおり店は繁盛していた。しかし、いつも見かけないような客が引つ切り無しに訪れてくるのだ。

「にーちゃん！ 持ち帰りで！」
「あいよー」

いつも見かけないような客は、サングラスをして、表情は硬い。そして服の下には虎や龍の模様がありそんな方々なのだ。

「にーちゃん、金ここに置いてくでー」
「まいどー」

そして、その怪しい客は決まって一万円を置いていくのだ。ちなみに持ち帰りの金額は八百円だ。

「儲かるのはええんやけど、なんか怪しいなあ」

閉店後、訝しげにそんなことをつぶやいていた良太郎の目がふと小麦粉に留まる。

「ま、まさか……」

良太郎はどこかの三番倉庫でやり取りされそうな場面を思い浮かべた。

「……これは！」

白い粉を人差し指に少しつけて舐めてみた良太郎は驚きを隠せなかった。

「こんな上質な小麦粉は食べたことがねえ！」

普通の質のいい小麦粉だった。

「でもこれが一万とは思えねえなあ」

謎が深まっただけだった。

「しょうがねえな、突き止めてみるか」

良太郎は、次の日怪しい客をつけてみることにした。すると不思議なことに、どの店でも一万で支払いをしていた。

「どういうことだ？ 砂糖が一万もするのか？ 片栗粉が一万もするのか？」

つけ始めてから一時間ほど経ったころだろうか。一つのビルの中へと入っていく。良太郎は物陰に隠れて様子を伺った。

「それにしても見つかりませんね兄貴」

「おうそうだな。それにしてもオヤジにも困ったもんだぜ。この町のどこかに時価一億円の麻薬を隠したなんてな」

「しかもそれを自分の目利きだけで一万円で買いなおしてこいだなんて、いくら小さな町でも無理ってもんですよね兄貴？」

「まったくだ。白い粉を売ってる店がスーパーだけで何軒あると思ってるんだ。しかも好み焼き屋まで粉を売るときてやがる」

小麦粉……砂糖……片栗粉……白い粉……麻薬！？ 良太郎の中でキーワードがぐるぐると回りまるでホームズのごとく理解した。
(どこがやねん)

「あいつらヤクザだったのか。それで白い粉を集めて一億円の麻薬を探してたのか」

その時、良太郎の見たことのある顔の人物がビルに入ってきた。

「どうや？ 見つかったか？」

「オヤジ！」

「いい加減見つけたらどうだ？ 麻薬を見つけたやつにはこの松屋

一家を任せるのになあ」

そう、中に入ってきたのは小麦粉業者の松屋章吉だった。

「ま、松屋さんはヤクザだったのか」

良太郎は逃げ出そうと踵を返したところだった。バキっといやな音を立てたのは。

「誰だ！　そこにいるのは！」

しまった！　と心の中で思っては見たものの遅かった。

「おやおや、浪花良太郎さんではないですか」

「いやあどうもどうも。お世話になります」

松屋章吉はその場にいた部下二人に目配せをして、拳銃の銃口を良太郎に向けさせた。

「残念やな。あんたのお好み焼きはなかなかおいしかったんやけどな」

殺されると悟った良太郎は自分の知りうる限りの知恵を振り絞った。

「この場にあるものでなんとかならないか……」

そこにあるのは無数の白い粉だ。良太郎はあることを思い出した。それはまだ良太郎が見習いするとき働いていた店で小麦粉が散乱してるところに火をつけたところ厨房が爆発を起こした事件だ。

「使える！ 粉塵爆弾だ！」

良太郎はとつさに辺りかまわず粉の袋を破って部屋の中に粉を充満させた。

「兄貴！ やつちやいましょう！」

舎弟は銃をぶつ放そうとしている。

「バカヤロウ！ 死にてえのか！」

松屋章吉は必死にとめた。

「引火したら爆発するぞ！」

「今のうちに俺は逃げるとするか」

良太郎はそそくさと帰ろうとしたときだった。

「動くな！ 警察だ！ 抵抗すると打つぞ！」

どこから駆けつけた刑事と思われる人物が銃を構えて松屋一家に叫んでいる。彼の名前は大木幸男。刑事になりたての新米刑事だ。過去六回腹痛で試験に落ちて七回目でやっと刑事になれたと言っなかなか不幸な人物だった。

「よしそのまま銃を置け！」

じわりじわりと幸男が松屋一家に近寄る。しかし、不幸な人生を歩んできた彼の足元にバナナの皮があるのは当然なのかもしれない。

つるりん。

「あーれー」

ズキューン！ ドゴオオオオオオン！

滑って転んで銃が暴発して爆発した。彼ならではの芸当だ。数刻後、アフロになった五人が警察によって保護された。

「さて。松屋章吉。一億の麻薬はどこに隠したのだ？」

松屋章吉は取り調べ専門の山さん刑事にライトを当てられていた。

「浪花のところに届けたさ。もっともどっかいっちまったみたいだな」

果たして麻薬はどこに消えたのだろうか？ この謎は一向に解けないみたいだ。

ちなみにこの日浪花良太郎のお好み焼きを食べた客は何故かもう一度食べたいという衝動にひどく駆られ、数日間行列がやむことがなかった。良太郎は自分の腕が上がったと確信し、二号店を出す計画を立てている。

＼浪花良太郎の場合＼ 終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860d/>

各駅停車ショートショート

2010年10月22日00時03分発行